

今回は“非具象の世界”と題し、いわゆる具象絵画でない絵画を展示することとした。第一回とサブタイトルがあるのは今後もこの種の催しを続けて行く意志を示したものである。今回抜けている幾何学的乃至ハードエッジ的な絵画は次回以降に展示したいと考えている。

“非具象”(non-figurative)という言葉の意味、その定義といったことについては、ここで厳密にやるだけの当方にはその準備もないし、もともとその力もない。同じ類の言葉に“抽象”(Abstract)また“非対象”(non-objective)——マーレヴィッチに“The non-objective world”と題する論文がある——という言葉がある。それぞれの持つ意味とその違い、さらにはその歴史的ななりたちについては美学上興味ある問題であると思うが、差し当り当方としてはそれらを全部引くくめて、いわゆる具象絵画(再現芸術)にあらざる絵画、すなわちわれわれの周辺にある具体的な事物を再現したり、思い出させたりすることのない絵画をここでは展示しようと思う。

このいささか仰々しいタイトルで展覧会を催

す所以のものは何か?、という、非具象ないし抽象絵画が、わが国においては正当に評価されておらず、従って展示される機会が少い、という現状をつねづね不思議に思っているからである。

実際のところ、わが国の絵画市場はほとんど具象絵画で占められている。非具象—抽象絵画を取り扱っている画廊は極めて少数である。美術館もしかりである。今日、今もって東京には真の意味で現代美術館(コンテンポラリーミュージアム)と言える美術館はない。

ところが、非具象—抽象絵画は今世紀の初めに生れ、今や絵画史上確固とした分野を形成している。カンディンスキー、モンドリアン、マーレヴィッチ等の作品は古典としてしかるべき美術館に納まっている。もしも、これら非具象—抽象絵画を全くないものと仮定すると、絵画史はいかに淋しく貧困なものになることか!

以上のようなことを考えると、何も今さら当小画廊がレイレイしく“非具象の世界”展など催すのはいささかアナクロニズムの感がしないでもないのである。にもかかわらず敢えて展示す

る所以のものは、わが国の現在のこの時点において、具象絵画に偏り過ぎ、非具象—抽象絵画が正当に評価されていないアンバランスを奇妙に感ずる故である。もちろん、このアンバランスな状況はまだまだ続くであろう。見渡したところわが国で、現代美術が正当に評価される道程は遠く、環境は暗いというのが実感である。今回の催しなど、まさしく貧者の一燈というところであろうか？

ところで、絵画の本当の面白さは非具象—抽象絵画が面白いと思った時ではないだろうか、自分の体験に即してそう思うのである。それが面白いと納得することができる、具象絵画がこれまでとは違った新しい表情でわれわれの前に現われてくるのも不思議なことである。

十数年前、小生は始めて非具象—抽象絵画を求めた。それはフォンタナの版画とサム・フランスの色彩リトであった。それは新しい体験であり新しい未知の世界に踏み込んだ興奮で一杯であった。いく分の危具感を感じたのは、やはり従来の慣習がそうさせたのであろう。ところがこの新しい世界は途方もなく豊かな世界で、

爾来、美の王国の“とりこ”になり、いまやとらわれっぱなしである。それだけ魅力ある世界なのだ、と思う。

最後に、絵画は結局のところ作品をこの眼でジカに、無心にみる以外いたし方のないものである。しかしその手引きとして理解のための参考書があればありがたいことである。もし適当な本はないかと問われたならば、次の2書を挙げたい。

乾 由明：「抽象絵画」カラーブックス(83),
昭40 保育社刊

高階秀爾：「ピカソと抽象絵画」現代教養文庫
(457), 昭39 社会思想社刊

この2冊の本は今回も読み返し、改めて得るところが多かった。小生の下手な解説よりもその方がずっと手っとり早くかつ正確であるので付記する次第である。

1979年5月 佐谷画廊

佐谷和彦